

闘
技
場(前編)

岡
本
俊
弥

遭遇点に向かう斜面は、無数の岩場から成り立っている。

険しい岩塊が影を引く。その影は光の中で輝く岩膚と対になって、不規則な斑紋を描いた。強烈な日差し。装甲を焼き付かせる、強く激しい陽の光。

乾き切った大気だった。

陽光にさらされた表層は、燃え立つほど気温が上がる。けれど、影の領域に入ると、急速に温度が下降した。そんな影と光の中を、交互に跨ぎこしていった。

何日も前から、制御機能に障害が生じている。昼間のある時間帯になると、きまつて運動能力が低下した。氷点下まで下がる夜の方が、いくらか回復するようだった。視野を覆い隠す岩を、ぎりぎりの間隙で通過する。

闇と光の照度の差は、それほど問題にならない。ただ、広く見渡せるだけの空間が必要だった。

約定期間は、終わりに近づいていた。

今では敵側の〈蜂〉の姿もなく、真昼の下でゆっくり登攀をつづけても、それほど危険はなかった。位置を特定されると条件は著しく悪化する。移動は常に行なわれなければならない。

岩塊を抜けると、急に見晴らしがよくなる。雲はどこにも見えず、遠赤外から紫外線領域までを含む視覚に、空が一杯に写り込んだ。不思議な蒼さに満ちている。対して、岩場は赤い色を帯びていた。太陽は、右手方向にあった。

頭上を遮ぎるものは、何一つない。

高原の一区画を見渡す。

小高い丘だった。そこからの眺めだけで総てを知ることとは、もとより不可能だった。

脚部が、脆い岩を突き崩す。八本の長脚で足場を保持すると、丘の頂に静止する。

急勾配の斜面が終わるところ、すぐ手前に金属の残骸が見えた。黒ずみ、押し潰さ

れ、砕けた岩屑に、半ばまで埋まっている。その原形をうかがわせるものは、ほとんど残されてはいない。

滞空し滑り降り、風に舞う〈蜂〉。あれは、天から墜ちた〈蜂〉だ。もう何週間も前に死んでいる。

丘陵の影が窪地に落ちている。草一つない岩場と、破壊された機械。

全景を一瞥すると、次の探査点へ移動をはじめめる。六本の脚が足場をもとめる。

約定は、いつになく長期にわたった。だが、時間という要素は、約定に何の意味も与えはしない。最後の敵を、見出すまでは……。

そのとき、何かが見えた。

奇妙な感覚だった。

これまでの経験とは、どこかが違っている。見過ごしはありえない。存在しなかったものが、今、視界にある。

脚を持ち上げた姿勢のまま停止する。

わずかの間を置いて、異物ははっきりと見分けられた。

滑り落ちる寸前の半ばかしぐような恰好で、そのものは斜面にとどまっていた。既に日陰にすっぽり包み込まれ、わずかな照り返しとその表層に磨かれた金属の光沢を滲ませている。

何かは分からなかった。

掩蔽されているわけでもないのに、シンボルは認識できなかった。

それは、先細りの胴と胴部をとりまく円環から成っていた。円環からは、さらに外へと、放射状に広がる輻が見えた。

明確な輪郭はつかみとれない。これだけの明るさがあるのに、全形は闇に沈んでいくかのようだった。

一つの外形が同定され、と思う間に別の外形へと入れかわる。どれも規定のシンボルではない。何が起こったのか、戸惑いは去らなかった。

どうすべきかを決めないまま、それに接近する。

約定の中で、出来ることは限られる。戦うのか逃げるのか様子を見るのか、いくつかの選択肢から選べるだけだ。

しかし、行動せざるをえない。領域に、無意味な異物が侵入する理由はないからだ。それは、反応を見せずただ存在する。

偽装が行なわれている徴候は、どこにも感じられない。

これまで敵が仕掛けてきた原始的な罠とは明らかに違う。むしろ、それには確固とした存在感があった。

環は、いくつかの円弧を継いだ構造から成っている。半ば透明の材質がいく枚も重なり合い、その各層は複雑なスペクトルの光沢を見せた。環にさえぎられ、本体はこれほど近接した地点からでも観察できない。

目視情報は、不安定感をさらに増しただけだった。

岩陰に入る。低地に降りるに従って、視野は急速に狭まっていく。岩場が重心の低い体を包みこみ、蒼い空だけが真上に広がる。

岩のはざまを抜けようとしたそのとき、何か嫌な感じがした。まだ、希薄な予感でしかなかったが。

一つに見えた胴部は、二本のねじくれた棒状の塔に分かれていた。環は、その表面

に、あらゆる方向の光景を映し出す。無数の反射鏡をちりばめたようだった。

空、暗い岩、白い照り返しにきらめく丘の頂、そして、〈蜘蛛〉の姿——角張った頭部、楕円形の装甲板、均等に延びる八本の脚——また、空。鏡像はどれもが明確な境界を持たず、お互い溶け合っている。

今では細部までが見て取れる。

塔は、さらに微細な構造に分割される。剥き出しの管が表層を走り、渦を巻く。刻み込まれた模様なのかもしれない。どこまでが境界であるのか、鏡をもつ環なのか、それさえ不明瞭だった。でたために築かれた迷路だった。

前進を続ける。

しかし、自動的な運動とは別に、焦燥は、急速に高まっていく。

光の箭——環の一端から、オレンジ色の箭が差し込む。付近を明るく照らす光は、夕陽の残照に似ていた。

後退せよ。

脈絡もなく、自動的な警告メッセージが表示される。

後退せよ。

避けがたい破滅の予感があった。

1

フロントガラスからのぞく道路は、純白に照り映えている。

日差しのは大半は、偏光フィルターでさえぎられていた。だが、そこだけ色彩の褪せた一本の道路は、現実感そのものを失っているように思えた。

幾島は、目を横手の窓へと移す。

砂漠だ。

ひどすぎる。なんだって俺はこんなところにいるんだ、話が違うだろ。

幾島はぶつぶつとつぶやくが、自動運転車に乗っているのは一人だけだ。答える相手はいない。

鉄分を含んだ赤茶けた砂と、荒削りの岩の平原。

ところどころに見える、黒い塊は何だろう。建物の跡か、ここに住んでいた人がいるとは思えないが。

わずかの灌木の彼方、地平線に食糧塔が林立している。真昼の大气の中で、塔の群れは陽炎でしかない。黒く塗られ、一見切れ目のない壁面は、実際には、ハニカム状に組み上げられた、放熱板の集合体らしかった。

…：なにもない。

信じられないほどの空虚さ、そしてまた、この凶悪な日差し。

三日前まで、幾島は失業者だった。

チームを辞めてから、次の所属が決まらなかった。その前からオフィアの口はじり貧だったが、ここまで厳しいとは思っていなかった。年齢的な問題もあった。反射神経や体力は年齢と比例して衰える。そんなことは、数年前からもう見えていたのだ。

しかも、チームワークという意味では幾島は問題児だった。仲間と相いれず、暴言を吐いては居場所を失ってきた。若いうちはそれでも良かったが、若手の指導や管理の仕事もできないようでは、どこにも引き受け手はいない。

生活費に事欠くようになって行動が荒んできた幾島は、業界からは干されたも同然だった。

「幾島さん、お話しできませんか」

立ち飲みの居酒屋で一人呑んでいると、いつの間にか横に来た男が声をかけてきた。幾島は顔も見ずに返事をする。

「なんだよ、どういってお話なんだ」

「お仕事の依頼です」

改めて顔を向ける。こんな場所で聞く言葉とも思えなかった。

「……どこのチームだ」

「リーグのお仕事ではありません」

「俺ができるのはそれだけなんだが」

「おっしゃる通り、幾島さんにはこれまでの経験を生かしていただけます。ただし、リーグではありません」

その後、男は幾島が行ったことのない店へ誘った。カウンターだけの小さな店で、

客を絞る秘密めいた店だった。男は名刺を差し出した。

International Criminal Court

Law Enforcement Department

Clerk Hirotooshi Takamizawa

「なんだ、英語じゃ分かん」

「幾島さん、国際刑事裁判所はご存知でしょう。わたしは書記官を務めております高見沢と申します」

「知らないね」

「国連の傘下で、主に戦争犯罪を裁くための国際機関です」
急に警戒した様子で、幾島は口を挟む。

「戦争犯罪ってなんだ、なぜおれに用がある」

「順を追ってお話します」

高見沢と名乗った男は、ささやくような声で次のような話をした。

国際刑事裁判所には、国連発足以来の長い歴史がある。

文字通りの裁判所だが、戦争行為に伴う重大犯罪を処罰する機関である。国家間の紛争ではなく、個人の行為を裁く。罪状は特殊だが、国内にあるふつうの裁判所の国際版ともいえる。成立した当初は、米中など有力な大国が批准せず、対象が大幅に限されていた。

「国際的な裁判所には、法執行が伴ってこそ意味がでてきます。大国が反対しているようでは何の力もない。ところが、ある条件のもとに大半の国が参加するようになったのです」

久しぶりの高い酒だ。ピッチを上げ吞んでいて、ふと気づくと、酒を勧める高見沢はグラスにまったく口を付けていない。

「それが、決闘条項なのです」

自動運転車は、巡航速度を保ったまま走り続ける。

車内は思ったより広い。外の明るさと比べるせいか、薄暗い穴倉のようだ。運転席

はなく、手動運転のための装備、コンソールやハンドルも見当たらない。送迎専用車だった。

ただ、なぜか、正面の窓にガネシヤの立体像が映っている。

象頭の神の姿。

幾島は、無理に体をくつろがせようとした。落ち着かない。異国のデザインで設計されたこの車には、なじめないところがある。インテリアも、室内のシートからの匂いも異質だった。

砂漠に撒き散らされる陽光を、車は動力に変換する。毎日がこんな天気なのだろう。車には、十分すぎるエネルギーだった。

乗り込んで、もう一時間余りが過ぎていた。真っ直ぐの道で、どこまで走るのか見当もつかない。

高見沢からは、こまごまとした契約条項を聞かされたが、幾島の頭には入ってこなかった。報酬に気を取られたのだ。最近ではめったに手にできない金額だった。

「幾島さんは、まず契約をしていただないといけません。庁舎までご足労をおかけし

ます。もちろん、旅費や日当はこちら持ちです。法執行部門は検察の下部組織になるのですが、都会にオフィスはない。独立性を確保するために、ちよつと離れたところにあるので、ご不便をおかけします」

ちよつと離れた、か。だまされたな。

目的地在南アジアにあると聞いて、幾島は驚いた。国内の事務所に行くと思つていたので。パスポートの期限を確かめただけで、飛行機に乗せられ、翌日の朝にはニューデリーに到着した。そこから、さらに国内便に乗り継ぎ、パキスタンとの国境に近い地方空港に迎えの車が来ていたので。

なぜこんな僻地に作る必要があるのか。こんな時代なんだから、どこだっていいじゃないか。

実際、彼が過去対戦した相手や、自分のチームのメンバーですら、たいてい世界のあちこちに散らばっていた。遠隔地の信号遅延はシステムが補正してくれる。海外遠征をしたことはない。

幾島はVRスポーツ界で、ちよつとは名の知れたアスリートだった。

集団ロールプレイと、格闘戦が融合されたVRスポーツ業界は、人気の浮沈が激しい。対象とするスポーツのプラットフォーム自体が数年単位で交代するし、場合によっては過去の経験が全く生きないこともある。

実在の歴史をベースにした古代王国の覇権争い、ファンタジー世界の英雄譚、宇宙を舞台にしたスペースオペラ、世界大戦下の戦車戦や艦隊決戦、二十世紀初頭の暗黒都市でのギャング抗争。何でもありだが、数名から数百名にもなるチームプレイが基本だった。プロ参加のゲームは、コンシューマーユーザのシステムよりも、センサー感が引き上げられていた。結果的に難易度アップにつながる

アスリートの寿命は短く、五年も務まれば長い方だった。その中で幾島は十年を越えて生きてきた。さまざまなプラットフォームで、活躍できるだけの才能があったわけだ。しかし、反射神経が衰える年齢に差し掛かってからは目立たなくなった。変化が激しい分、名前を忘れられるのも早かった。

何回か微睡を繰り返したあと、ようやく道路の終点に純白に輝く庁舎が見えた。車はほとんど速度を緩めず、急速に接近していった。砂漠と対照的に、緑化された

広大な敷地に建てられている。

大げさな建物だ。こんなところまで、訪れる者がそんなにいるのか。

高見沢はこんなふうにした。

「法執行部門には大きな権限が与えられているのです。裁判の判決に相当する、法の執行を担っていますからね」

「よく分からんな、何を執行するんだ。刑務所に叩き込むのか」

「それは検察本体の仕事ですね。法執行は裁判をするのです」

「裁判官じゃないのに」

「ええ、裁判官ではありませんが、判決はその結果で下されるのです」

幾島は訳が分からなくなつて口を閉ざす。

大きくカーブを回り、車は構内に入った。エントランスらしきものが見えないと思つたら、地下へ続く斜路があった。真っ直ぐに下りると、柱の見えないがらんとした駐車ブースに停車した。

庁舎に降り立つ。手足を伸ばして欠伸をかみ殺す。

明るいブルーのシンボルが、すぐ前の空中に見え出口を示す。

短い通路を歩くと、いつの間にかもう自然光の溢れる一階部分だった。

広い窓だ。

青い色に染まった、光の洩れる天窗。砂漠の風景が見渡せる壁面一杯の窓——空気は妙に冷たい。

本物ではないのだろう。外からは、一つの窓もみえなかった。

シンボルが光る。次のフロアに入った。光が落ち闇に包まれた。

誰かが、近付いてくる。

「ようこそ」女の声が言った。日本語だった。

照明の暗さに目が慣れると、青い制服を着た女が浮かんだ。黒い髪を束ねた、小柄の女性だった。

「イツシマさんですね。法執行部門のノエマです」

「ああ、よろしく」

ノエマは小さくうなずくと、手を軽く上げて後から付いてくるよう促した。

「こっちに来てからの手順は何も聞いていないのでね」

「ご心配には及びません」

窓のあるフロアまで一旦戻る。相変わらず、景色は荒涼とした砂漠のありさまを写し出している。

「明かり取り？」

「飾りですよ。特に意味はないですね」

そっけなくノエマは答えた。

広い斜路をたどって、ふたたび地下へ向った。

柱のない丸い広間だった。円を成す壁面には、別の部屋への扉が並んでいる。照明は、壁の下部に一定の間隔をおいて配置され、わずかな領域を照らすだけだ。どれぐらいたい高さがあるのか、暗いので天井すら見定められない。広間の中央には、影となつて聳える、モニュメントらしきものがある。それは、なんの装飾もない円柱であり、床から天を貫き通している。

「普遍性のシンボルだといわれています」ノエマが言う。

「国際機関らしくないですが、現地の人はストゥーバと呼んでいます」
手を振って、

「ここはアジャンターなのです」

符牒なのだろうが、訳が分からない。完全にアウエーだな。

幾島は黙ってうなづいた。

後で聞いたが、アジャンターとは長い間忘れられていた佛教遺跡で「誰もいないところ」という意味らしかった。多数の僧侶が起居した石窟院だが、もはや誰もいない廃墟だ。

誰もいない。たしかにそうだ。人影もない。

「お仕事の内容はお聞きですね」

壁の扉が開かれると、思ったより小さな部屋があり、装飾も何もない会議机とタブレットが置かれていた。契約書が提示され、署名を促される。

ノエマが語りはじめた。

「われわれは約定を司っています。裁判所では証拠に基づく判決を出しますが、ご存

知の通り戦争犯罪には個人の責任だけでなく、国家のメンツが絡んできます。大国が小国を断罪すると、不公平さがつきまとう。事実だけでは理解が得られない。そこで、最終的な決着を図るために約定が作られた。ここまではいいですね」

「こちらの聞いたのは、決闘のことだけでね」

「決闘ね。たしかに決闘条項と俗称されますが、正式には約定なんですよ」

「決闘って結局ゲームでしょう」

「イツシマさんのゲームとは少し違います。利用している技術は同様のものといえませんが」

あのととき高見沢はこう説明した。

「分かりやすく言うと、ゲームの勝負で決着をつけるということですよ」

バーの薄暗い照明の下だ。

「裁判所がそんなことをするのか」

「法の下に行うのです、もちろんね。被告側と検察側がプレイヤーを選択する。勝者が決まるまでゲームは続けられる。罪の重さとゲームの内容はリンクしない。お互い

の条件を公平にするために、隔離された専用施設を設ける。あくまでもゲームの結果だけで判決が下る」

「なんだか信じられんな、聞いたことがない」

「約定の中身は一般には公表されていません。判決が公表されるだけです」

「ふん……まあ俺にはどうでもいいがな。プレイできればそれでいい」

納得できたわけではないが、幾島はそれ以上考えるのを止めた。あの会話が三日前だった。

「それで、俺は何の判決に関わるんだ」

ノエマは淡々と答える。

「機密事項なのでプレイヤーには明かされません。イツシマさんが検察側なのか、被告側なのかも含めてです」

「そもそも俺がなぜ選ばれたんだ。他にもたくさんいる中で」

「約定で用いられる装置に最適なアスリートが選択されます。いま第一線にいない人から選ばれることもある」

幾島は足元を見られたような気がした。売れっ子のアスリートが何日も仕事を開けると、何をしていたか怪しまれるだろう。

「誰と戦っているかも分からないのか」

「そうなりますね」

ノエマは事務的に告げた。

「システムはご自分で確認してください。習熟期間は二日間です。問題があるようでしたらお申し出ください。今から辞退することもできますが、お勧めはしませんよ」
条件がどうあれ、辞めるつもりなどなかった。幾島には余裕がないのだ。

約定のシステムはすべて庁舎内にある。

クラウドにはなく、そもそも外部ネットワークと接続していない。計算リソース、ハードウェアがすべてクロード環境にある。機密保持を優先すれば、確かにそうなるのかも知れないが、今どき異例のシステムだった。不正にもなる外部からの干渉がなく、しかも、対戦中の信号遅延が最小限なのがメリットだろう。
つまり、幾島の対戦相手もこの庁舎のどこかにいるのだ。

宿泊施設と、食事や休憩のためのラウンジは指定されていた。せいぜい十数人までのキャパしかない小さなラウンジには、いつ行っても誰もいなかった。セキュリティの関係だろうが、観衆であふれるオープンステージや、賑やかなチームに慣れていた幾島には、なじみのない静けさだった。

約定は、ある種のサバイバルゲームである。

領域。そこは、区切られた四万の区画が含まれている。領域には、巨大な岩がでたらめに積み重ねられた岩場、高さ数メートルにもなる野草に覆いつくされたステップ、この周囲と違って白い砂が風紋を描く砂丘など、さまざまな地形が含まれる。

駒には四つの種類がある。

一つ目は〈蜈蚣〉と呼ばれる。

偏平な本体、二〇組の足。頭部から尾部まで、ゆるやかな傾斜を描く胴。短く、細い脚。十数個のユニットが組合わされた、十メートルに及ぶ自在に伸縮する胴。うねうねと迅速に動くが、全高が低く視界が限定される。

二つ目は〈蝸牛〉と呼ばれる。

ドーム状の胴、首をもたげる頭部。吸着性を持った偽足は、ぐらつく岩の上でも足場を失わない。頭部を伸ばすと五メートルにも達する。駒の中では最大の大きさがあり、重く固い装甲殻を持つ。ただ、動作は緩慢だ。

三つ目は〈蜂〉と呼ばれる。

唯一飛べる駒だ。光学迷彩が仕掛けられていて、下から存在を知ることが難しい。〈蜂〉は複数の眼を装備する。微妙に機能の差異がある眼だ。動くもの、周囲と異なる温度分布、反射光の検出、色の分析などなど、地上のあらゆる動きを見定める監視装置なのだ。

最後に、〈蜘蛛〉である。

体長は二メートル強。八本の脚部は、体長の倍ほどの長さがある。〈蜘蛛〉はチェスのキングに相当する。これが破壊されたらゲームオーバーだ。

すべては現実の材料、メカニズムに従って物理計算されたユニットから出来上っている。複数のサスペンションが組み合わされた蜘蛛の足、蝸牛の偽足は樹脂と吸着機構で作られている。

もちろん、これらは実在しない。領域という仮想空間で動くシミュレーションだ。そこは一般的なVRゲームと同じだろう。

ただ、ゲームシステムとしては奇妙なものだった。

幾島はそれぞれの駒を操れるのだが、一度に一つしか動かせない。その間、他の駒はほとんど木偶人形になる。知能がないのだ。これはおかしな仕様だった。

おかしいといえば、この駒自身も妙だった。飛び道具に相当する武器は一切ない。各駒に通信手段がなく、集団戦にも向いていない。人間のような腕も、蹴りつける足も持たない。蜈蚣の顎で噛みつくか、蝸牛の重量ある胴体で踏みつぶすか、蜂で体当たりするか。攻撃手段が限られるのだ。

これでは、見せ場は作れないだろう。地味に殺し合うだけだ。まあ、興行じゃないからやむを得ないのだろうが。

しかも虫に似ている。

幾島は虫を嫌っていた。何とも不快だった。

見渡す限りの草原だ。

幾島は〈蜂〉の視点で区画を見渡していた。

自陣の駒は、はるか後方を前進している。〈蝸牛〉が辛うじて頭を出していたが、他の駒は草に埋もれて視界がなかった。

前方に動きがある。敵側の駒たちが進んでくるのが見えた。

方向を見定めると、次に自陣の真上を飛ぶ〈蜂〉に切り替え、駒たちの動きを確認する。敵に相対するよう向きを変えてやらないといけない。

自陣の駒は百個ほどもある。五〇の〈蜈蚣〉、四〇の〈蝸牛〉、一〇の〈蜂〉と一つの〈蜘蛛〉だ。幾島はこれらで密集陣を組み、〈蜂〉で周囲を警戒させながら進めることにした。駒は自律的な判断をしないので、その都度個別に動作を指示してやらなければいけない。通信手段がないということは、幾島自身が憑依対象を切り替える必要がある。きわめて面倒だった。

駒には、淡い意識の断片があるだけだ。近づくものが、敵であるのか味方なのかを、辛うじて識別できた。駒は、必ずしも統率がとられていない。視認範囲に駒が接近す

ると、自動的に闘い合う。

一陣営に属する駒には、ベーシックな個性が与えられる。

幾島が習熟運転をした際に学習されたデータが駒へ転写される。これが、幾島がコントロールしていない時に、最低限の行動基準になるらしい。

何れにしても、これが最初の会敵だ。

直ぐ決着がつくとは思えないが、少なくとも敵の力量が分かる。大きな戦果は狙わず、最小限の損害で終えるべきだろう。事前情報が何も無い状態で、むやみに戦力を消耗したくない。

何かが急速に接近してくる。

正面だ。こちらを目指している。

ホバリング状態だった〈蜂〉の推進軸を後方に切り替え、かわそうとする。

追従してくる。

武装のない偵察機としては、とりあえず逃げるほかない。

わずかな空隙を、敵の〈蜂〉が飛びぬけていく。迷彩が邪魔をするが、これほど近

くなら見失うことはない。旋回して、また向かってくる。

何をするのか。考えられるのは体当たりだ。目を潰そうとしているのだろう。

機敏な動作だ。低知能の自動運動ではない。

そう、こいつが敵のプレイヤーなのだ。

早々にお目にかかれたわけだ。

幾島はにやりと笑いながら、〈蜂〉の出力を最大に引き上げた。

2

遠いユローの亡霊が這いだす。

それは、薄汚れた石造建築が、えんえんと続く町並であったり、荒れ果てた農園の遠景であったりしたが、不思議なことに、その多くは私が幼かった頃の記憶なのだ。そう、空虚さだ。なにもない空しさ、絶望と退廃が、連想を誘うのだ。

もう三十年以上も前に、私はユロー域治安維持軍とともに、混乱のただなかを転々

と移り住んだことがある。父は軍属だった。どんな仕事をしていたのかは、憶えてもいない。たびたびの旅行と車窓の風景、無数の貧民窟と乞食の群れ、遠望する人々の表情の暗さ——点景のように、それらが思い出せる。おそらく、なんの関連もない細切れの記憶の中の一断面だ。

それに比べれば、十年近くになる機構監察庁の勤務などは、遠い過去のぬけがらにすぎなかった。沈滞と繰り返しという日常だけだ。

ただ、客観的な現実を目にすることはできた。四百年近く続いた覇権を失い、永遠の冬に閉じ込められたユローを。

また何百年か、何千年かが過ぎるまで、あの残酷な文明が甦ることはないだろう。世界のためには、これでよかったのかも知れない。

制度が定められてから、何年が経ったのだろう。

機構が世界を統治する以前、いわゆる暴乱の百年期は、史上最悪の時代だった。十億単位の人々が、飢え、戦乱の中で死んでいった。複雑な民族の価値感が、十九世紀以来の覇権国家と競合し殺し合いを誘発した。やがて、疲弊した世界は、あらゆる経

済、政治の意志決定を支配する新秩序国家連合、いまの統制機構の管理下へと統合されていく。

しかし、定められる政策は、公正でなければならない。国家による自国優先策を許していたら、再び無秩序が生まれる。

約定は、武力で各種の問題を解決した過去の戦争と似ている。だが、大規模な資材を、たかだか一つの政治決着に費やすのは、あまりに馬鹿げた浪費だった。エイジアからユーロのいたるところに、その愚かさの印が放置されている。無駄に廃棄される、人も資源も、もうどこにも存在しない。

約定は、厳格な規則により、政策を代行する。

年に数度、約定は、必ず行なわれる。

私達は、セムレション房室に入った。一般の部屋よりずっと暗く、窓も見当たらない。

「対象領域です」

閃き——目の前に、領域の光景が一杯に展開した。

岩場だ。私の通り抜けた、あの砂漠以上に荒々しく、生命の気配に欠けていた。

記憶を増幅し再生したものと、どこか似通っている。本物ではないが、本物の断片だったと分かる。

「ここで二週間前からアヌバンドウ……約定が行なわれ、順調に終了するはずでした。プラーリは、何の異常も知らせませんでした。ただ、一点を除けば……」

それは、〈蜘蛛〉の全形だった。

扁平な甲羅、滑らかに延びる脚。本体の全長以上ある、八本の長い脚部だ。蜘蛛との、外見的な類似性は、ほとんどその足に由来する。他に、節足動物の特徴はなかった。だが、足を鞭のように撓わせ、動く様子は、やはり〈蜘蛛〉の名がふさわしい。

次の瞬間、像が切替わる。

——熔融した、金属の残滓だけが見えた。原形をほとんどとどめない、無残な焼け残りだった。ただ、一本の長脚が、溶けずに残されていた。

背景は、あの岩場だった。

細かく砕けた岩へ、覆い被さる形で、〈蜘蛛〉は焼き殺されている。本体を融解し

た原因は、推測できなかった。

「〈蜘蛛〉の最後の姿です。駒は、約定の過程で大半破壊されます。破壊は、通常の現象として定義されています。ですが、このような壊されかたはありません。まるで、熱に溶かされたように見えるでしょう。『高熱』は、約定で生じえない現象です」
場面が変わる。

はじめ、それは積み上げられた金属の塊に見えた。白茶けた岩の間で、どす黒い表面に陽光が散乱する。平板な金属板をでたために切断し、寄せ集めたようだった。

ただ、その無秩序さにはどこか作為があった。何か意図があるはずだ。

視点はそのものの周囲を巡っていく。最初の印象だけは、どの方向からも変化しない。

「これはプラーリが信号記録から再現した画像です」

「画像記録しかないわけですか」

「計算結果の信号記録を、すべて残すわけにはいきませんからね。ガタナ・サンチャリットになりますが、ガタナが起こった事象は画像記録されます」

「約定の駒ではありませんね」

「おっしゃるとおりです」

「侵入不可能なはずの約定プラーリに、不正が行われたわけだ」

「短信でお伝えしたとおりです」

書記官のノエシスは、言わずもがなのことを繰り返すなど、たしなめているかのようだった。だからお前がいるのだろうか。

不可侵にして絶対であるはずの約定に、存在しえないものが混じり込み、約定の結果を不確かにした。通常のセムレションであれば、また再実行も可能だろうが、大きな利害が絡む政治的な約定では厄介だ。

そう思うと同時に、漠然とした不安感が沸き上がる。自分はどう見るのだろうか。何か理由付けできる原因を見つけれられるのだろうか。

像は消えた。

ノエシスが、私の顔を見上げる。何か言いたげな――だが、口に出そうとしない。

「像は、これで終わりなのですか」

「ご希望があれば、視点を変えた画像をいくらでも生成することは可能です。ただ、新たな知見が得られるものでもありませんよ」

部屋の奥へと、再び歩き始める。

「それよりも、エスリトを尋問されてはいかがですか」

「監禁しているのですか」

「監禁ではありません。犯罪者とは違う。協力をいただいているだけです」

「ふん、操縦者は第三国の人間ですよね」

「ええ、あなたと同じ日系人です」

ノエシスは、こちらをちらりと見て言った。

「そうですか。珍しいな」

中央政府に日系の同僚は少なかった。極東地区では多いのかもしれない。

「正規の職員ではありません。わたしが選んだわけではありませんが、適性を見込まれたでしょう」

エスリトならそんな経緯もあるだろう。

すると、ノエシスはこう言い添えた。

「念のために、お願いしておきます。一つの政策に対して、約定は一度しか行なわれません。二度はありえません。この約定にも、決定が下されなければなりません。この限られた結果から、意味を得なければなりません。私たちが求めているのは異物の正体ではありません。その点を、お忘れにならないように」

「そんなことは」

分かっている、と言いかけて口を閉じた。分かっているのはお互いさまだ。

私は相手の言葉に、どこか不安な感情が潜んでいることを感じ取った。

